

序 文

本論集は、平成18年度から島根大学教育学部の学部長裁量経費を取得しておこなわれた共同研究プロジェクト「世代間コミュニケーションと教育」の最初の成果である。メンバーとその専門分野は、「研究組織」の表のとおりである。

研究組織

所属・職	氏 名	専門分野	備 考
教育学部・教授	秋重幸邦	物理学	
〃	足立悦男	国語教育学	
〃	新井知生	美 術	
〃	野村律夫	地 学	研究会事務局（2006-‘07年度）
〃	福田景道	国文学	
〃	福田哲之	書 道	研究会事務局（2006-‘07年度）
〃	楨原 茂	歴史学	研究会事務局（代表）
〃	山崎 亮	宗教学	
教育学部・准教授	縄田裕幸	英語学	
〃	正岡さち	住居学	研究会事務局

われわれは平成18年9月に学部長裁量経費の配分を申請した段階で、次のような問題意識を抱いていた。「ネット社会の発展は、未曾有の情報量、通信の速度と簡便さをもたらした。その一方で、対面的関係を基礎とする人間本来の直接的コミュニケーションの機会は徐々に少なくなり、とくに異世代間のコミュニケーションの場は家庭においてすら限られるようになった。他方で、全国に先駆け超高齢化社会となった山陰地方では、高齢者の社会的孤立化が目立つようになり、これをできるだけ予防することは地域社会にとって喫緊の課題になっている。

これら二つの状況が関連し合い、いずれ地域社会に深刻な影響を及ぼすであろうとの認識のもとに、本プロジェクトでは他世代、特に高齢者理解における「コミュニケーション」の役割を多角的に検討することを目的とする。とりわけ、コミュニティにとって最重要な社会化の機関である学校において世代間コミュニケーションがいかなる教育的効果をもちうるかを、教育プログラム化を視野に入れながら考察することになる。」（「平成18年度島根大学教育学部学部長裁量経費要求書」より）

このように初発段階においては、山陰地方、島根県の地域特性、とくに高齢化の問題を考慮しながら、世代間のコミュニケーションの回復と活性化が地域社会に活力を取りもどす一つの方途であり、またこれを学校教育のとくに文系教科の教育プログラムにも生かすことができるのではないかという漠然とした想定のもとに、共同研究をスタートさせた。この研究目的には、メンバーのなかに自然科学分野を専門とする教員も含まれるように、文系中心ながら、理系教員もふくめ広く学際的な研究交流を進めたいという意図も込められていた。

これまで、5回の公開講演会と8回の研究発表会をおこなってきた。講演者・発表者と題目、要旨は、後述の「研究活動報告」に記しているとおりである。研究活動の実際の進展とともに、当初の問題設定は

やや拙速であったことが明らかになり、むしろメンバーそれぞれに関心のあるところで研究を進め、関連分野の専門家に講演を依頼しつつ、「世代間コミュニケーションと教育」という共通テーマのもとでどのような研究を展開できるのか、その外延を広げてみようということになった。

このような過程を経たのち、あらためて諸研究の相互関連性を把握するために作成したのが図1の座標である。座標の縦軸は、世代間コミュニケーションが創り出す関係性＝「連なり・つながり」を示しており、その関係が時間的なものか空間的なものかという基準で分けている。横軸は、世代間コミュニケーションの主体を示しており、左右を不特定多数の集団か一定程度限定された集団かという基準で分けている。この図は、それぞれの研究内容をふまえながら共同研究の方向性をさぐるためのいわば操作的な道具であり、何らかの専門的理論にもとづいたものではないことは断るまでもない。さらに、この図には、諸々の研究テーマと教育との関連性が直接には反映されていない。とはいえ、この図を手がかりに、これまでプロジェクトで発表された諸研究の相互関連性をある程度は掴み出すことができる。

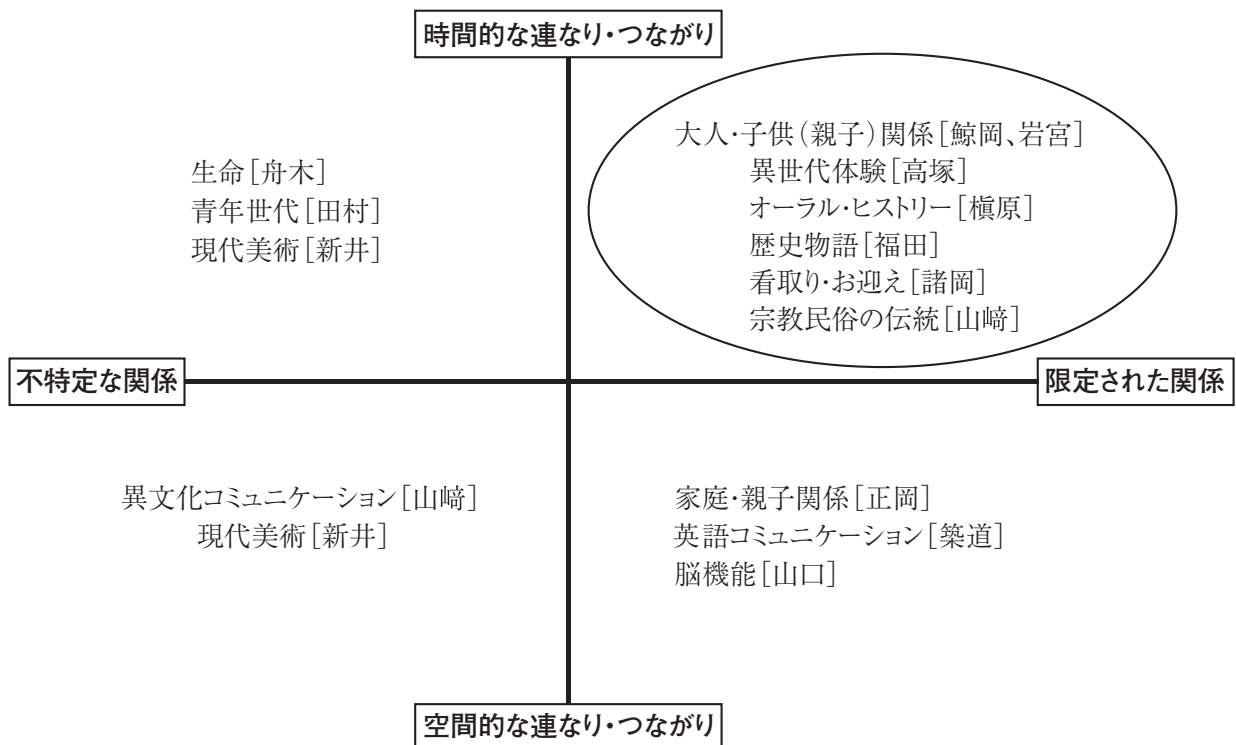
まず、第1象限（以下、第1領域と呼ぶ）の諸研究を紹介しよう。鯨岡峻は、「育てられー育つ」というキーワードを用いながら、世代間（親子間、教師・子ども間）の関係性のなかでこそ真の主体性が生まれ、保育・教育、看取りが豊かに循環していくことを論じた。岩宮恵子は、臨床現場で出会う子どもの心理的困難の一要因として、親子のコミュニケーションにおける世代間境界の崩れがあるのではないかという見方を示した。諸岡了介は、終末期患者が死に臨む際に体験する〈お迎え〉が本人の心理にとっただけでなく、周囲の者、とくに残される家族とのコミュニケーションにおいても重要な意味をもっていることを指摘した。高塚人志は高校や大学での授業実践に基づき、コミュニケーション能力の基本を聴く力、相手を分かる力であるとした上で、そのような能力は長期的に関係を続けるなかでしか身につかないこと、関係の相互性のなかで自己の「役立ち感」を得ることの大切さを強調した。楨原茂は、オーラル・ヒストリーをめぐる議論、及び宮澤康人のいう「大人と子供の関係史」から示唆を受けながら、世代間コミュニケーションとしてのオーラル・ヒストリーを学校教育の現場で生かす可能性について指摘した。福田景道は、大鏡や今鏡、無名草子など日本の古典文学から読み取られる世代間ギャップやコミュニケーションを論じ、とくに説話文学の語り手・聞き手の関係に教育の要素が見いだせることを指摘した。さらに山崎亮は、出雲地方の宗教民俗の調査を通して、「伝統」が世代を越えて受け継がれる過程で絶えざる変容を遂げてきたことを明らかにし、その成果をフランス人に講演した際のコミュニケーションギャップについても論じた。この領域に分類された諸研究は、地域、家族や友人からクラスや学校まで、比較的限定された集団内における時間的・世代的関係を対象としている。この領域には、親子関係、教師生徒関係、あるいは世代間の文化の継承もしくは対立という観点から、教育という人の営みにもっとも関連づけやすいテーマが集まっているといえる。

第2象限（以下、第2領域）に分類された諸研究は、時間的・世代的な関係性にかかわるが、関係し合う〔と想定される〕主体が不特定多数である集団を対象としている。舟木賢治は、高校生物の授業における解剖や実験を工夫することにより、生徒たちに自他の生命を尊重する態度を養うことができると主張した。この場合、特定されざる「生命」の理解がポイントである。また田村栄子は、ドイツ現代史における「青年」世代の役割に着目し、ヴァイマル共和国からナチス第三帝国、そして戦後1968年の「青年反乱」など、時代の節目において世代間の緊張や対立が歴史を動かす重要なファクターとなったことを論じた。新井知生は、近代における美術作品の「理念」と「スタイル」の変遷をたどり、現代のコンセプチュアル・アートが空間の組織と異化によるコミュニケーションの試みとして美術界に新しい時代を画したことを指摘した。新井の議論は、次の第3象限の空間的な関係性にもかかわっている。

第3象限（以下、第3領域）の諸研究は、やはり不特定多数者間の関係が対象とされるが、主体間の空間的な隔たりがコミュニケーションの前提とされる。そこにおいては、異文化や芸術作品が空間的な隔たりを越えて新たにどのような関係性を生み出すかが問題となる。新井は美術作品を媒体とする作者と鑑賞者のコミュニケーションを論じ、山崎はフランスでおこなった出雲地方の神話と祭礼に関する講演を題材に、異文化間コミュニケーションについて考察した。

第4象限（以下、第4領域）の諸研究は、比較的限定された集団内の、空間的な隔たり、位置関係を対象とする。脳科学の分野から山口修平が、前頭葉の機能が個人の身体と人格にかかわるだけでなく、他者とのコミュニケーションにとっても重要な役割を果たしていることを科学的に解説した。築道と明は、小学校の英語活動ではコミュニケーション能力の開発と言語教育が分離されてはならず、両者の関係を重視した実践が求められていると論じた。正岡さちは、近代日本の住宅の変遷をたどりながら、住宅の間取りが家族のコミュニケーションのあり方を条件づけ、子どものコミュニケーション能力の発達にも影響していることを指摘した。

図1 「世代間コミュニケーションと教育」講演・研究発表の位置関係



ひとまずこのように諸研究が分類されるとして、共同研究の中心となるのはやはり第1領域の諸研究ということになるであろう。その理由は、共通テーマが示すとおり、われわれが世代間コミュニケーションと教育との関わりを重視しているからである。したがって、第2、第3、第4の領域は、第1領域を包み込むかたちで、関連する研究群を構成するということになる。

以上が、「世代間コミュニケーションと教育」プロジェクトの現状である。これを踏まえて、今後の課題と展望についてもふれておきたい。まず最初に挙げておきたい点は、世代間コミュニケーション研究の教育プログラムへの活用・応用である。この点は、プロジェクト初年度から主要目的の一つとして掲げられながら、具体的な成果はほとんど得られなかった。この目的の実現には、教育学部附属学校園の教員との連携による研究が不可欠であるが、学部教員、附属学校教員それぞれにここ数年繁忙をきわめる状況にあり、じっくり腰を据えて共同研究に取り組めるような環境になかった。今後も事情は大きくは変わらないかもしれないが、附属学校教員の関心を惹起すべく、第1領域を中心により積極的に教育プログラム開発の提案をおこなっていきたい。

他方で、教育学部の枠を越えて、全学的に共同研究の輪を広げ、より多角的に「世代間コミュニケーションと教育」プロジェクトへの参加を呼びかけていきたい。第1領域だけでなく、第2、第3、第4領域まで、理系も含め、もっと多くの研究者が係われるはずである。そうなれば、学校教育にとどまらず、より多様な研究成果による社会的貢献も展望できるであろう。

現時点では、たしかに「共同研究」としての実質的な意味、換言すれば、諸々の論考相互の内容の凝集性という点で甚だ不十分なものであることはメンバー全員が認識している。しかし島根大学教育学部の教員が個々の研究領域を越えて共同研究を進め、学部紀要という媒体を通してその成果を公表し、大方の批判をおごうとする試みは初めてのことであり、今後の島根大学、教育学部の研究活性化への刺激となることが期待される。そして、上述のような新たな取り組みを進めていく上で、本別冊特集号が一里塚として重要な意義をもつことになるよう願っている。

(注) 以上の論点整理において言及した、新井知生、福田景道、正岡さち、槇原茂、山崎亮の研究発表は、その後の研究の進展を組み込んだ論考としてまとめられ、本論集に収められている。但し、正岡の論考は、世代間コミュニケーションとしての「家族の団らん」に焦点を絞り、調査結果について考察したものである。

主な参考文献

カール・マンハイム『世代・競争』誠信書房、1958年。

鯨岡峻「次世代育成の諸問題—いま、何を育てる必要があるのか」『教育学研究』第71巻第3号（特集 少子化社会と子ども・学校・家族）、2004年。

鈴木剛「世代間コミュニケーション試論（その1）」『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』50号、2001年。

鈴木剛「世代間コミュニケーション試論（その2）」『北星論集』（北星学園大学文学部）第41巻、2004年。

鈴木剛「世代間コミュニケーション試論（その3）」『北星論集』（北星学園大学文学部）第43巻第2号、2006年。

宮澤康人『大人と子供の関係史序説：教育学と歴史的方法』柏書房、1998年。

村上宏昭「『世代』概念をめぐる一考察—世代史研究の拡張へ向けて—」『歴史家協会年報』第3号、2007年。